事例番号：03	分類項目：　1）妊婦
困難事例タイトル： 妊娠期におけるカフェインの摂取量について	
事例対象者：a 妊婦	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・個別相談時に参加者の妊婦より、カフェインの摂取量についての相談を受けた。 ・相談者はインターネットの情報サイトで、妊娠中のカフェイン摂取は流産の危険性があるという旨を見て、コーヒーはもちろん、お茶なども制限しなければならないのかと不安になっていた。	
対応結果： ・国としての公的な指標は示されていないため、明確な発言は避け、カフェインを特に多く含むコーヒー等は1日3杯程度以内にする。主治医に相談してみるといった回答をした。カフェイン含有量が多い食品も伝えた。 ・現在こういった相談には WHO の指標も参考にしているが、日本人のカフェイン耐性も考慮された基準となるものが、早急に望まれる。	

事例番号：04	分類項目：　2）食物アレルギー
困難事例タイトル： 食物アレルギー	
事例対象者：b 授乳婦 c 乳幼児（6か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・本児は、頻繁に血便が出るため、小児科で検査したところ、食物アレルギーと診断された。医師から1歳まで離乳食を始めないように指示を受けている。母乳のみになるため、母親も食事の制限があり、半年で体重が7kg減っている。頭痛や疲労感がある。 ・母親の除去しているものは、卵、鶏肉、小麦、豚肉、大豆、菓子、油脂類等。母親自身にも貧血の傾向があるため、鉄分の多いものやバランスを考えた食事についての説明をしたが、除去しているものが多いため、医師と相談しながらすすめるように話した。	
対応結果： ・3か月後育児相談に来所。 ・血便も落ち着き、9か月から離乳食を開始している。野菜の中でも血便が出るものもあるが、量も増えてきており、次はたんぱく質（白身魚）を増やす段階へ。母親も今までのような食事制限はなく、現在は卵のみ完全除去している。	

事例番号：05	分類項目： 2) 食物アレルギー
困難事例タイトル： アレルギーについて	
事例対象者： c 乳幼児（7 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・多くの食品にアレルギー反応を示しており、離乳食が進んでいない。	
対応結果： ・通院している病院に栄養士がいたので、そこで相談するように話す。	

事例番号：06	分類項目： 2) 食物アレルギー
困難事例タイトル： 食物アレルギーの対応について	
事例対象者： c 乳幼児（2 歳 0 か月）	回答者職種：b 保健師 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・正期産による分娩で特に異常なし。 ・生後 3 か月から顔面に湿疹あり、軟膏処方。母親、薬の副作用を怖がり、使わず。3 か月ごろにも湿疹続いていた。 ・6 か月ごろ、アレルギーため通院続けていた。食物制限指示なし。 ・1 歳時、アレルギーよくならず、卵、大豆、小麦、牛乳の制限指示あり。母親は除去しているというも、あいまいで、母親自身、母乳であるが、制限なし。 ・祖父母（同居している）は、食物アレルギーへの理解乏しく、「何でも与えてしまう」と母親の訴えあり。	
対応結果： ・主治医の指示に従うように助言したが、除去食はあいまいな対応を母親が行っていた。生命に危険なアレルギー反応はなかったが、除去食について、どのように対応すべきか、母親自身もあいまいで、現在も除去食をしていると話すが、具体的に話を聞くとあいまいな対応が続いている。	

事例番号：07	分類項目： 2) 食物アレルギー
困難事例タイトル： アレルギーについて	
事例対象者： c 乳幼児（7 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・食物アレルギーを心配して、両親、兄弟に卵アレルギーがないにも関わらず、7 か月時点で卵を避けている。	
対応結果： ・食物アレルギーがないにも関わらず、必要以上に食品を避けないこと、また気になるようなら自己診断せず、時期を見て病院でアレルギー検査をするように話す。	

事例番号：08	分類項目： 2) 食物アレルギー
困難事例タイトル： 食物アレルギー食の指導について	
事例対象者： c 乳幼児（8 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類 ：d その他（保健所）
経過と背景： ・第 2 子で、卵白、牛乳・乳製品の食物アレルギーがあり、病院を数回変え、児にあう病院を探した。 ・食物アレルギーの症状がひどい時は、ミルクや離乳食が落ち着いて食べることができず、体重増加が緩やかで、除去食の進め方、身体発育状況についての相談があった。	
対応結果： ・指導時は、体重も少しずつ増加しており、保護者も除去食について意欲的であった。 ・除去食の進め方、離乳食のバランスや量について説明し、児の様子に合わせ焦らず離乳食を進めていくように話をした。	

事例番号：09	分類項目： 2) 食物アレルギー
困難事例タイトル： アレルギーの疑いのある乳児の母親への食事指導	
事例対象者： c 乳幼児（6 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・子の体重 3%以下の女児。母乳のみ。食物アレルギーの可能性があるため、病院でアレルギー検査を受け、結果待ち（7 月）。 ・病院から母親の食事は、米、大豆、肉、魚を除去するように指示されている。（肉と魚は一度ゆでて油抜きをしてから食べている）。除去する食品が多く、何を食べてよいのかわからない。	
対応結果： ・現在も魚、野菜のみの食事で、豆腐、牛乳を母親が摂取すると軽度の発疹がり、控えている。原因が何か厳密に調べたうえで食物を除去することになるので、母親の自己判断で食事制限しないように指導している。現在もフォロー中であり、月 1 回の育児相談には来ているが、栄養相談はなし。	

事例番号：10	分類項目： 3) 臨床例
困難事例タイトル： 口唇口蓋裂のある双子で超低体重出生児の摂食指導	
事例対象者： c 乳幼児（1 歳 1 か月（修正月齢 9 か月））	回答者職種：b 保健師 施設種類 ：d その他（保健所）
経過と背景： ・H21.10.18 生、それぞれの出生体重 400g 台、マーゲンチューブ使用 ・10 か月（修正月齢 6 か月）時、それぞれ体重 7kg 台で口唇裂の手術を実施した。現在のそれぞれの体重約 8-9 kg。今後、修正月齢 1 歳 6 か月頃、口蓋裂の手術予定である。 ・栄養：1 日ミルク 200ml×5 回（経口でミルク 10ml＋マーゲンチューブにて 190ml）、離乳食は 1 日 1 回で、市販の離乳食で、サラサラ状のものを摂取している。 ・口蓋裂がまだ残っており、体重増加量も考慮しながら、今後経口での食事摂取を順序良く、バランスのとれた栄養を進めていることに悩んでいる。	
対応結果： ・現在、歯科衛生士や ST, 栄養士による離乳食の形態や量などの指導のほか、口腔ケアや口唇裂の術部マッサージを行っている。 ・またフォローアップミルクを与える時期や注入食導入の必要性と時期等についても主治医と連絡を取り合いながら検討している。	

事例番号：11	分類項目：　3) 臨床例
困難事例タイトル： 口蓋裂の乳児への離乳食指導	
事例対象者：　c 乳幼児（7-8 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・口蓋裂という先天性異常に対しての離乳食については、特別な専門知識を幼児、指導が困難と感じた。	
対応結果： ・詳細な食事の摂り方等については、医師への相談を勧めた。	

事例番号：12	分類項目：　3) 臨床例
困難事例タイトル： 感覚過敏がある児への食事指導について	
事例対象者：　c 乳幼児（1 歳 6 か月）	回答者職種：b 保健師 施設種類　：d その他（市役所）
経過と背景： ・3 か月健診で児の表情変化乏しく、視線合いにくいことから、事後教室参加していた。 ・6 か月頃から離乳食開始したが、食べることへの意欲が低く、1 歳を過ぎてもドロドロ状のものしか食べなかった。 ・下肢筋力が弱いこともあり、心配に思った母が小児神経科受診し、栄養指導を受けた。	
対応結果： ・口腔内の感覚過敏があるため、スプーンではなく、箸で離乳食を与えるように助言を受け、実践したところ、少しずつではあるが過敏さが軽減され、形あるものを食べられるようになっている。	

事例番号：13	分類項目：　3) 臨床例
困難事例タイトル： 感覚過敏により、水分摂取が困難であった幼児	
事例対象者：c 乳幼児（出生時～6 歳（平成 16 年 9 月生））	回答者職種：b 保健師 施設種類　：d その他（保健所）

経過と背景：

（出生時）：39 週、3,080g、50 cmで出生。分娩異常なし。ミルクの飲みが悪く、1 か月健診後に総合病院を紹介され栄養チューブが挿入された。

（4 か月児健診）：声帯や気道が狭くなっており（病名不明、X-P や CT 異常なし）、小児科、耳鼻科で検査及び経過観察。1 週間に 1 回栄養チューブを交換する。

（7 か月児健診）：診断名は先天性喘息、離乳食 2 回（おかゆ、野菜、白身魚、卵黄、豆腐、パン、果物、鶏肉）、ミルクは 180cc×5 回、ミルクを吐きやすい。

（9 か月）：ミルクを主に離乳食 3 回。ミルクを経口で試すが断念。

（1 歳 6 か月）：過敏、表情が乏しい、抱っこを嫌がる、触れるのを嫌がる。つたい歩き 1 歳 3 か月、独歩 1 歳 6 か月、言葉は「パパ」、「よいしょ」が出ている。保護者は「飲食を自ら摂取できるのはいつからか、栄養チューブをつけたまま幼稚園に入園できるか、食事の与え方に問題はあるか、発達の遅れが食に関しても問題になるか」等心配していた。健診後、当保健所の発達障害や疑いのあるお子さんを対象にしている言葉と心の教室に参加。手や顔に触れられるのを極端に嫌がる。睡眠障害あり。視線が合わない、人見知りが強い。

（1 歳 10 か月）：ミルク 200～400cc×4 回、固形物を経口で少しずつ摂取し始める。

（2 歳）：児童相談所にて発達検査実施。中等度精神遅滞、DQ42 判定。行動は 1 歳程度、言葉は 7 か月程度。

（3 歳）：固形物の摂取可。幼稚園に入園し、水分摂取は母が園に出向いて行う。何回か栄養チューブの抜管を試みるが脱水症状を起こしてしまい再挿管となる。乳酸飲料（ヤクルト等）であれば経口で飲むことができる。幼稚園と週 1 回の知的障害児施設の通園を併用。

（6 歳）：集団生活に慣れ、休まずに療育施設と保育園に通う。成長とともに栄養チューブに頼らず水分摂取可能となり、抜管して生活する。

対応結果：

・母は栄養チューブが入ることに最初は抵抗があったようだが、頻回に及ぶ吐乳から解放されたことで育児疲労が軽減し、チューブの受け入れは次第に良くなった。水分摂取の困難さが発育障害に起因していることが伺えたため、2 歳を区切りに児童相談所に発育検査をしてもらうことで早期に療育機関へ紹介し、家族が児に合わせた対応ができるように支援した。

・母はうつ病により精神的に不安定であることが多いが、育児に奮闘し、児の成長に一喜一憂している。保健師が定期的に家庭訪問を実施し、メール相談に応じることで児の発育・発達状態や栄養摂取方法を確認し、母の精神面のサポートをした。

・母は自己判断によるうつ病治療中断により体調を崩すこともあったが、実家に生活基盤を移すことで育児サポートも得られ気持ちが安定してきている。「乳児期は吐乳が多く、この子を可愛いと思えない時期が続いた」と話していたが、実母や夫のサポートにより育児に前向きになり、体調の自己管理にも気をつけている。

・児は栄養チューブを入れて幼稚園に通ったが、幼稚園教諭はじめ周囲の理解があったことで、母は「この子なりの成長があると思えるようになった」と話す。

事例番号：14	分類項目：　3) 臨床例

困難事例タイトル：

本児、下痢を繰り返し、乳糖不耐症疑い、母、二分脊椎症で経過長く、後に適応障害と判断。
離乳食がうまく進まず関わった例

事例対象者：　c 乳幼児（8 か月） d その他（母親）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：d その他（保健所）

経過と背景：

・第 1 子出産後、乳腺炎とストレスでつらいと電話があり、保健師が関わっていた。母、二分脊椎症で経過長い。第 1 子、10 か月児健診時、育児ストレス軽減して、支援終了。その後、本児である第 2 子出産。本児が 8 か月の時、母より電話あり。

（主訴）：フォローアップミルクを与えたいが育児用ミルクからフォローアップミルクに変更していいものか。

（状況）：母の困りごとはフォローアップミルクについてのみ。離乳食について確認すると、1 回の食事量が増えないため、離乳食は 1 日 1 回、2 週間前より、下痢となり、病院受診。医師より離乳食は続けていよいと話があったが、母の判断で離乳食中断、育児用ミルクのみと話があった。

（判断）：最初はミルクについて相談したいので、離乳食の話は必要ないとのことだったが、話しているうちに下痢の話や離乳食が進んでいない話が出てきた、母、話まとまらず、こだわり強い様子。

（伝えたこと）：フォローアップミルクの説明、離乳食の進め方について、助言。再度経過観察。

・本児の 10 か月健診が控えていたので、保健師より健診前に電話連絡。

（状況）：医師より乳糖不耐症の話があり、母の判断で乳糖を含まないミルクを与えていた。離乳食進まず。

・10 か月健診時

（状況）：離乳食は再開していたが、回数は 1 日 1 回。

（伝えたこと）：離乳食の回数、形態について助言。

・健診から 9 日後、母より電話連絡あり。

（主訴）：離乳食の回数を 1 回から 2 回にしたが食べない。

（伝えたこと）：手軽に与えられるものや味付け、ミルクの量について助言。

対応結果：

・ミルクについては、徐々に普通の育児用ミルクへ慣らしていった

・食事については、1 歳 7 か月児の時点で、ムラ食いではあるが、3 食食べられるようになり、母の負担軽減。

・食事面での支援は終了。

・母の体調面や家庭環境については保健師が継続支援中。

事例番号：15	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 離乳食の開始をあえて遅らせているという場合	
事例対象者：　c 乳幼児（7 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・母親が本で独学し、1 歳までは母乳のみで育てるとのことだった。	
対応結果： ・離乳食には母乳だけでは不足してくる成長に必要な栄養素を食べ物からとるという意味と、赤ちゃんに「噛む練習」をさせてあげる意味あると伝えたうえで、その後の判断は母親に任せるしかなかったが、やはり 1 歳までは母乳のみで育てるとのことだった。	

事例番号：16	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 母乳中心で好きなものだけ食べ、食事が進まない事例	
事例対象者：　c 乳幼児（1 歳 6 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士、b 保健師 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・9 か月：保健センター育児相談来所。食べムラ、遊び食べ、食事リズムの乱れあり。 ・1 歳 1 か月：朝食、昼食、夕食ともにいちごしか食べない。1 歳 6 日カウプ指数 16.7 だったのだが、1 歳 1 か月 26 日カウプ指数 15.3（体重 7,705g、身長 70.8cm）と減少している。 ・1 歳 3 か月：「食事はバランスを考えて作っている。また食事の量は児が賢くなり自分で食調整しているので、栄養相談は受けない」と父。生活リズムも大人ペースで動いている。 ・1 歳 4 か月：母乳中心、ごはん茶碗 1/2 杯、おかず少しとおやつ（桃、バナナ等）程度。「母乳は 2 歳くらいまで与える」と母。 ・1 歳 6 か月：1 歳 6 か月健診受診。母乳は食事前に与えるものとしている。DVD30 分見てから母乳を与え、食事するという流れができている。両親は「母乳をやめると思春期に爆発する」と卒乳に対して乗り気ではない。	
対応結果： ・育児相談時に生活リズムや食生活について話すも、こちらの指導を受け入れてくれず、持論を展開する。	

事例番号：17	分類項目： 4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 引越し、母乳栄養	
事例対象者： c 乳幼児（5 か月）	回答者職種：b 保健師 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・転入先より第 1 子の発育状況について情報提供あったが、第 2 子については特になかった。 ・乳幼児相談会で体重測定したところ、1 日体重増加量 5g のため、人工ミルク授乳を追加することを勧めた。 ・引越しで物品がどこにあるか、片付けができていないことを理由にミルク授乳をしようとしない。児も少食に慣れているのか空腹による不機嫌さはない。 ・12 月 16 日現在、11.1g/日の増加とやや改善？がみられた。	
対応結果： ・機会あるごとに体重測定し、ミルク授乳を勧めるが、実行しない。 ・行事等にはよく出かけるので、出会った際にはまず母乳を飲ますようにしている。 ・離乳食を少し早めに進めていくことを提案。	

事例番号：18	分類項目： 4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 過度な母乳優先などによる栄養不足	
事例対象者： c 乳幼児（10 か月、1 歳 6 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類 ：b 保健センター
経過と背景： ・母親やかかりつけ医師が過度に母乳を優先するあまり、離乳食がおろそかになる、または離乳食の進みが悪くなり、その結果、成長曲線から大きく外れてしまう。 母乳または育児用ミルクのみを与え、離乳食をなかなか始めないケースもある。	
対応結果： ・母親に離乳食の必要性や与え方などを説明し、始めるべき時期にまだ始めていない場合には離乳食を始めることや、月齢によっては栄養の主体を母乳やミルクから離乳食にシフトするも、母親は母乳が一番とする考え方を変えてくれない場合や、離乳食の重要性を理解してくれないことがある。	

事例番号：19	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 健診時、小児科医よりミルクを足すように指導があるにもかかわらず、母乳にこだわる	
事例対象者：c 乳幼児（4 か月）	回答者職種：b 保健師 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

・4 か月児健診時、小児科医より、体重増加が好ましくないためミルクを足すよう指導有。児は泣き方も弱々しく、手足も全く動かさない。

・児の体重があまり増えていないことに対し、母親は気になるものの、足す様子は見受けられない。母乳不足の場合、その状態が長く続くことは望ましくないと小児科医の見解有。

・出生体重 3,080g、体重（5 か月 4 日）5,100g

・生後 2 か月の時、授乳状況の確認を含め出産した産院で教育入院。この時すでに母乳不足が判明している。この産院でもこの時ミルクを足す指導しているが、母親の強い希望があり、これ以上の責任は持てないことから、「小児科医と相談するように」と産院での関わりを終えている。

・母親は様々な情報を得るも中途半端に理解し、何でも試してみようというタイプではあるが、最終的には自己判断して、医療機関等のすすめには応じないことが多い。

対応結果：

・体重の増えが悪いため、市の健診後、市実施の二次健診の受診をすすめる。その間担当保健師より、確認の電話を入れている（結果として二次健診はキャンセル）。

・夫のすすめもあり、二次健診前に病院へ受診。その結果、体重（5 か月 17 日）5,200g、1 日増加量 15.4g。小児科医より表情もよいので、このまま母乳のみでよいとのこと。

・6 か月から離乳食開始でもよいとも。医療管理され、医師との信頼もあついため、今後は受診継続の確認の連絡、何か心配があれば相談してほしい旨を母に伝える。

・その後母からの連絡はなく、約 1 年後転出。

事例番号：20	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 乳幼児の離乳食拒絶	
事例対象者：c 乳幼児（11 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：d その他（保健所）
経過と背景： ・経過：生後 6 か月から離乳食を開始した。2 か月間は順調で、舌でつぶせる固さのものまで進んでいた。生後 8 か月頃から下痢が続くため、離乳食を中止して病院を受診すると、乳糖の不消化が原因と分かり、ミルクを代えるように指示があった。その後、離乳食を再開させたが、食べさせようとすると、反射的に吐く。スプーンも嫌がる。 ・最近はミルク以外の味に慣れさせるため、食事をミキサーにかけ、ドロドロ状態にして、ストローマグで 1 日に 3 回与えている。内容量は 100ml 程度。栄養不足になってはいけないと思い、食後にミルクを 80-100ml 与えている。ほかにお茶 2 回/日程度、2 日に 1 回ジュースを 30ml くらい与えている。 ・バナナ等を与えても口に運ぶことなく、手でつぶしたり、机の下に落としたりする。母親から「どうやって離乳食を進めたらよいかわからない」との訴えあり、管理栄養士が保健師とともに同伴訪問を行った。 ・身体状況：11 か月時点の体重は 8,700g、歯は数本生えている。 ・背景：母親はうつ病の薬を服薬中。	
対応結果： ・母親の疾病を踏まえ、一時保育利用を検討し、経過観察とした。 ・継続してフォロー中。	

事例番号：21	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 離乳食の指導について	
事例対象者：c 乳幼児（11 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：d その他（保健所）
経過と背景： ・33 週で生まれた双子で、第 1 子は心疾患など、第 2 子は脳障がいなどがあり、医師からは離乳食の進め方については特に指示がなく、7 か月頃から離乳食を開始した。 ・9 か月頃から 2 回食とし、相談時にはペースト状の離乳食を食べているが、今後どのように進めていったらよいのか相談があった。	
対応結果： ・主治医と嚥下について連携をとり（第 2 子、気管切開）、形態については一人ひとりの様子をみながら、食材によって形態を変え、段階を踏んでアップするように説明した。	

事例番号：22	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 離乳食について不安が強いが、相談支援を希望しない保護者への関わり	
事例対象者：c 乳幼児（2-11 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

（家族背景）：母は不安神経症治療中で、県外の実家での支援を受けながら育児をしていた。児が 2 か月の時に当市へ転居。父は育児に協力的であるが、周囲に支援者もなく、里帰り先の健康センターから当市への継続支援依頼有。

（当市での関わり）

・2 か月：保健師訪問。体重 4790g（1 か月健診から 26g/日増加）、夜間睡眠良し。

・3 か月：保健師訪問。児の発育は良好であるが、発達や離乳食について質問多く有。母は当市での生活の不安を訴えるとともに、精神科通院受診予定。

・3 か月健診：体重 5,500g、予防接種の話をし出すと、不安が出てくるので、話が止まらず。

・5 か月：母より離乳食相談の電話連絡があるが、当日体調不良のため来所できないため、栄養士と保健師同行訪問する。体重 6,000g、離乳食のやり方や進め方を詳細にメモ書きし、先々の細かいことも質問する。その間父がずっと児の面倒をみている。

・7 か月：子育てホットラインに離乳食の電話相談（2 週間のあいだに 3 回）があり、「口から出す、嫌がって食べない、食べないとイライラする」など同じような相談内容が入る。同時に母親は体調不良や気分が不安定になると児童相談所にも相談し、一時保護やショートステイの利用もする。

・9 か月：保育所通園となるが、児や母もよく体調を崩し、気分が不安定になると、児童相談所には相談しているが、センターの支援は希望しない。

・11 か月：保健師が訪問するが不在。食生活相談の案内チラシを投函してくるが、連絡なし。

対応結果：

・離乳食の進捗状況が心配されるが、不通状態。今後はセンターでは 1 歳児健診の確認や 1 歳 6 か月健診等で継続支援。

・また保育所や児童相談所と情報を共有し、必要に応じて支援していく。

事例番号：23	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 母乳栄養を推奨するある特定の助産婦の離乳食指導と保健センターの指導内容の不一致	
事例対象者：c 乳幼児（10 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・9, 10 か月健診の問診票により、離乳食を始めていないことが発覚し、フォローの電話したところ、本児の父がアトピーのため、本児に離乳食を与えた時にアレルギー症状がでてしまうのではないかとの懸念があり、始めていないとのこと。 ・母は母乳外来で助産院に月 1 回通っており、そこでの助産師による指導の下育児をしている。1 歳までは完全母乳で育て、母自身は食事制限（肉と牛乳・乳製品の除去）と食物日誌を書くよう指導されている。 ・本児は至って健康で身体面も発達も順調。実際にアレルギー検査はしておらず、予防のための予防で離乳食を与えていない。 ・母は助産師の言うことを鵜呑みにし、全く疑問を持たず、他の専門職の意見は聞き入れない。外に出かけることも少なく、他の母と話す機会もないので、我が道を行くタイプ。 ・現在本児は 1 歳 3 か月で離乳食はおかゆ中心で、野菜はたまにあげる程度で母乳中心。新たに与える食材については母のつけている食物日誌をもとに決めていくとのこと。ここまでいくと、1 歳 6 か月健診までにたんぱく質が進んでいないのではないという心配がある。また今後の発達にも影響が出てくるのではないかと考えている。	
対応結果： ・保健師と同行訪問し、実際に離乳食を食べる様子を見学し、指導（11 か月 23 日）。その後はフォローとして電話連絡で現状確認をしている。 ・現在も継続的にフォローすることになっており、3 か月後の 1 歳 6 か月健診で様子確認予定。	

事例番号：24	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 離乳食の開始が遅く、7か月より1歳になるまで体重増加が著しく不良	
事例対象者：c 乳幼児（11か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

・9-10か月健診にて、体重増加不良のため要観察となる。出生体重2,986g、9-10か月健診時（10か月12日）7,260g。医師の指示にて母より保健センターに相談の電話あり。

・地区担当保健師による聞き取りを行ったところ、離乳食の開始が8か月頃と遅く、11か月現在母乳以外ほとんど食べられていないことが判明。

・母の希望もあり、家庭訪問にて食事の様子を確認。普段どおりの離乳食を与えてみるが口腔内へ食物及びスプーンが入ることを激しく拒否。唇にヨーグルトがつくのも激しく嫌がる。いったん授乳後、スティック状のベビー菓子を与えるとなめることは可能。

・まずはスプーンや食物が口に入る感触への拒否が減るように、口周りに触れたり、スティック状のものを噛ませてみるよう指導。過去に食べないからという理由で無理強いしていたこともあった様子なので、無理強いはせず、楽しい雰囲気を心がけるように促した。また粥は糊状になって、食べにくそうだったため、ゆるめの粥から口に入れる練習を指導した。

対応結果：

・地区担当保健師と相談しながら、保健センターの健康相談へのお誘いをし、継続して体重の伸び具合をチェックしている。

・当初「食べなければ、おっぱいでよい」という母の意識が強かったが、児が次第に食べ物に興味を持つようになったことで、食べない心配は減ってきている。

・1歳現在、体重も次第に伸びてきており、継続フォロー中。1歳3か月にて様子確認の連絡予定。

事例番号：25	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 発育不良、離乳食が進みにくい保育園児のケースについて	
事例対象者：c 乳幼児（11 か月）	回答者職種：b 保健師 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・生後 11 か月の乳児、父母、姉 2 人、本児聴覚障害あり。 ・保育園の先生より、発育不良と離乳食が進まないと相談あり。園訪問にて児の様子確認を行った。 ・体格小さい。離乳食を与えようとするが、大泣きで拒否。無理に口の中に入れ、何とか 2 口ほど食べることができた。その後のミルクは積極的に飲んだ。 ・母は「そのうち食べるようになる」とあまり気にせずにミルク中心で与えていたが、園医より発育不良を指摘されショックを受けた。 ・しかし、仕事が休みにくいという理由で小児科受診には消極的。園の保育士ともあまりコミュニケーションを取ろうとしなかった。	
対応結果： ・ミルク以外のものが口に入ることに過剰な反応があることや、ジェスチャーでのコミュニケーション、共感性が感じにくい面より、感覚過敏さ、社会性の弱さを持つ児ではないかと考え、療育病院受診勧奨を行った。 ・保育士同行で受診され、作業療法士よりフォローされている。	

事例番号：26	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 母乳育児にこだわる母への栄養・食生活指導	
事例対象者：c 乳幼児（1 歳 1 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

・出生体重 2,578g（40 週 3 日）、母の非妊娠時 BMI は 15、栄養士資格あり。

・児の体重の伸びが悪く、産婦人科での 1 か月健診ではミルクを足すように言われたが、その後保健師による新生児訪問時には足していなかった。母乳の出をよくするために助産院に通い、助産師より動物性脂肪を摂りすぎると母乳がつまるとアドバイスを受け、牛肉、豚肉は食べない。牛乳は大好きで妊娠前はよく飲んでいたが、アレルギーを心配し、牛乳から豆乳に代えている。母乳へのこだわりが非常に強い。その後、地区担当保健師から連絡や訪問をした。

・体重増加は新生児訪問時から 27 日間で 8.1g/日、生下時から 17.4g/日の増である。その時は児の脳や筋肉の発達のため、ミルクを足して十分な栄養をあげるように伝えたが、母は受け入れなかった。また町の乳幼児健康相談を勧めるも来所しなかった。

・4 か月児健診は父とともに 3 人で来所。身長、体重共に 3%タイル以下で医師より体重増加不良のため、体格フォローとの所見あり。

・その後 6 か月で離乳食を開始。管理栄養士による訪問では、短時間でおかゆとじゃが芋を食べていた。口腔は母乳を飲む動きであったが、吸啜反応は残っていなかった。訪問時「体重が停滞している」と母より発言有（5,400-5,500g 前後）。母乳への思いや考えについて質問したが、特に返答はなかった。その際もミルクを足すように話したが、母は授乳方法を変えるつもりはないことから、離乳食の量を増やし、開始後 1 か月で 2 回食にするように伝えた。

・その後、子育て支援センターの離乳食講座に参加し、児の食事状態を観察したところ、他の児が食べ終わったあとも栄養不足の状況が続いているためかずっと食べ続けていた。

・10 か月児健診時も身長、体重とも 3%タイル、母乳育児も変わらず。

・1 歳児で 6400g 程度、独歩あり。母子健康手帳の体重記入欄は欄外になってしまった。

対応結果：

・保健師、管理栄養士、子育て支援センター保育士より、何度も体重増加不良による発育発達の影響やミルクを足すように話したが、母親は受け入れずに現在まできてしまった。

・4 月から町立保育園への入園を希望しており、受け入れ予定の園長より児の様子について連絡あり。経過について報告済み。

事例番号：27	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： **離乳食を全く食べない**	
事例対象者：c 乳幼児（11 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター
経過と背景： ・児のかかりつけ医からの連絡により、電話で栄養相談となった。 ・6 か月頃から離乳食を始め、おかゆやじゃが芋を与えてみるも、スプーンを口元に近づけるだけで嫌がる。母はスプーンの材質の種類を代えて試したが、受け入れられない様子。 ・医師の助言でフォローアップミルクを与えるが、哺乳瓶を嫌がって泣き叫び哺乳量も少ない。母は無理にフォローアップミルクを飲ませることに困難さを感じている。児の体重及び身長は伸びを示している。母乳栄養。	
対応結果： ・電話での状況把握で、児の発育面を確認したが、難しかったため、地区担当保健師と家庭訪問を行った。おもちゃなど口にほとんど近づけず、卵ボーロの小さい乳児用おやつは指先でつまむが、投げて遊ぶ。 ・今後も引き続き保健師と児の発育、離乳食状況を確認、フォローしていく。	

事例番号：28	分類項目：　4）母乳、卒乳、離乳食【乳幼児】

困難事例タイトル：

離乳食が進まないことに苛立つ母の例

事例対象者：　c 乳幼児（10 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

10 か月児健診の際に「よだれが少なく、全然食べてくれない」との主訴があり、経過観察を開始した。

（10 か月児健診）：児 10 か月

・児：7 か月から離乳食開始。途中からスプーンを口に近づけるだけでも嫌がるようになった。母乳が好きで、ほとんど離乳食を受け入れない。多種のメニュー、スプーンを試す、良質な食材を選ぶなどの母による工夫にも効果は得られない。気が向いたとき、数口大人が食べているものを口に入れることはある。

・母：インターネットや友人から情報を集めては実践するが、ほとんど食べない児に対して焦りと苛立ちを感じている。他の児との比較や、育児情報の目安等を気にし過ぎてしまう。

（地区担当保健師より電話）：児 1 歳

・児：相変わらず離乳食はほとんど食べず、母乳を中心としている。気が向くとパンやめんを数口食べることはある。幼児用かっぱえびせんは手に取って食べる。

・母：食べてくれないため、卒乳する決心はつかない。仕方ないかと諦め始めている。

（栄養士より電話）：児 1 歳 2 か月

・児：状況は 10 か月の頃とほぼ変わらない。離乳食を食べないため、食後の母乳もよく飲み、頻繁に母乳を欲しがる。離乳食の工程をうまく踏めておらず、咀嚼・嚥下機能の獲得が不十分なため、噛んでは口から出してしまったり、受け入れが悪い。母乳をあげずに離乳食を出すと激しく泣き叫ぶ。

・母：児に振り回され、強いストレスを感じている。情報や周囲の指摘にも振り回され、不安が増大し悩んでいる。卒乳も考えてはいるが、集合住宅に住んでいるため、泣き声が気になり覚悟できない。

（栄養士より電話）：児 1 歳 4 か月

・児：祖父母宅を訪問したのをきっかけに食べるようになった軟飯に納豆が主だが、その他にも数種類食べられる。食事量が増えてきたため、授乳回数は減らないが、1 回に飲む時間は減った。

・母：食べるものが決まってしまうことに悩んではいるが、とりあえず安心している。訪問・来所相談ではなく、1 歳 6 か月児健診にて確認を希望。

（1 歳 6 か月児健診）：児 1 歳 7 か月

・児：1 歳 5 か月児に卒乳が完了し、大人用の茶碗で食べるほどまで食欲が出てきた。特定のものしか食べないということもなくなり、大人の食事とほぼ同じものが食べられるようになっている。

・母：インターネットの情報などを収集しつつ、完全に卒乳することができ、食事量も増えてよかったと話す。

対応結果：

（10 か月児健診）：母は育児に対して意欲的ではあるが、児の発育・発達の具合をうまく読み取ることができず、「年齢相応」を求めてしまう。咀嚼能力を考慮した形態、食品への親しみを持たせる工夫、生活リズムと授乳の間隔を持たせることの必要性、方法について説明し、2 か月後電話にて確認とした。

（地区担当保健師より電話）：母の不安を取り除く必要がある。月齢的にも無理に卒乳を進める必要はないことを説明し、焦らず進めていくことをすすめる。少しでも食事に興味が向くように 3 度の食事を出す機会は確保し、無理強いはしないように説明し、3 か月後に栄養士から電話で確認とした。

（栄養士より電話）：母は児の要求に負けており、食事への興味を促すような接し方ができていない様子。児の食事の受け入れ、母の負担からも卒乳は難しい。食事への興味を持たせることを優先的に考えるべきである。形態を前段階に戻すことをすすめ、咀嚼能力を段階的に育むためのポイントや授乳の間隔をあける、自分で食べる楽しみを感じさせる工夫について説明する。2 か月後に栄養士より電話し、母に訪問・来所相談の希望を聞き、対応する。

（栄養士より電話）：児が食べるようになったことで、母のストレスも徐々に解消されてきている。児は口溶け、のど越しの良いものの受け入れがよくなっている。食べられる食品の幅を広げていくための工夫と、引き続き噛む練習をするためのポイント、卒乳の方法について説明し、3 か月後の 1 歳 6 か月児健診にて経過を確認することとした。

（1 歳 6 か月児健診）：児の食事への興味も広がり、咀嚼・嚥下能力の徐々についてきたことから食事の受け入れが良くなった様子。それに伴い、母のストレスも緩和され、卒乳、幼児食への移行も児の様子を見ながら行えたようである。幼児食の形態のポイントや食品選びなどについて説明し、経過観察を終了した。

事例番号：29	分類項目：　4）母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 成長障害の認められる乳児に対し、ミルクを足すことを拒否	
事例対象者：c 乳幼児（4 か月）	回答者職種： 施設種類　：b 保健センター

経過と背景：

・出生体重 2,658g（36 週 5 日）。父医師、母保健師。第 1 子。

・3-4 か月児健診時、身体発育曲線の 3%を大きく下回る。ミルクを足すことを勧めるが、桶谷式母乳相談室に通院中で、ミルクを足すことを拒否。

・1 か月後の相談日に来所を促すが拒否。「最新の WHO 母乳育児の指針で、6 か月児は出生児の 2 倍の体重があればよいと言われている。6 か月で 2 倍にならなければ医療機関受診を考える」と母が発言。

・6 か月時に保健師が訪問。最近体重がよく伸びたので医療機関受診せず。桶谷式相談室に週 1 回通院中。母乳 1 回 3 時間以内。ミルクは足しているが 1 回 20ml/回、60ml/日以内。発育曲線からの乖離は変わらず。ミルクの量を増やすと母乳分泌が減ると言われたので、ミルクを増やす予定はなく、離乳食の量を増やしている。

・9-10 か月児健診未受診のため、母に電話で確認。病院で受診し、体重は経過観察。離乳食はアレルギーがあるため、おかゆと野菜のみ。たんぱく質は未開始。体格は今までのラインで伸びており、発達も月齢相応であるため、1 歳 6 か月健診を案内する。

・1 歳 6 か月健診前に転出のため、以後不明。

対応結果：

・・ミルクを足せば体重は伸びることが想定され、乳児の栄養について指導しようとするが、両親とも医療関係の専門職であり、こちらの発言について母が拒否するため、医療機関受診を勧めた。

・体格は児なりのラインで伸びていること、発達については順調であり、離乳食を開始して、このまま食事量が増えていけば体重も追いつくと考えられること、医療機関受診については肯定的だったため、定期的に連絡し、児の発育を確認することにした。

事例番号：30	分類項目：　4) 母乳・卒乳・離乳食
困難事例タイトル： 少食、体重増加不良、卒乳	
事例対象者：c 乳幼児（1 歳 7 か月）	回答者職種：a 管理栄養士・栄養士 施設種類　：d その他（保健所）

経過と背景：

・1 歳 6 か月児健診時、少食で食事回数も 2-3 回/日という状況で栄養相談に来られる。
・体重 9.0 kg、身長 76.8 cm、カウプ指数 15.3（4 か月時 17.4、10 か月時 17.3）
・日中の授乳が約 10 回、夜中も 2 時間おきに授乳あり、朝食は食べず、昼食、夕食は少ない。
・4 歳の兄がおり、兄も朝食は食べず、少食、偏食も激しい。
・健診当日も朝食、昼食を食べずに来所。外出先でもぐずり、母乳を欲しがるため与えてしまう。
・母親は「児がなくから」と卒乳を決断できていない。
・父親は仕事が忙しく、早朝から出勤し、夜は 10-11 時に帰宅する。休日は 3 回/月で、育児への協力が少ない。
・母の実家は遠方のため、祖父母への協力も難しい。
→生活リズムを整える（8 時までには起こす）、3 食食べる習慣をつける、外出時の授乳からなくす、以上の指導を行った。

対応結果：

・2 歳 2 か月までに計 4 回、状況確認を行った。母の卒乳への意識も高まり、食事内容、調理法などの助言を取り入れ、食事量、食事内容に少しずつの改善がみられてきたとのことであった。確認連絡が入ることで母も目標ができるようで、1 か月半後に連絡を希望された。
・回を重ねるごとに母の受け入れもよくなり、前向きな取り組みにつながっている。